

様式7 (事前・公表)

平成27年度 試験研究課題検討結果票 (事前)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・予想される成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
1	ニンジンの新発生病害(乾腐病)、障害(黒ずみ症等)対策技術の確立	平成28年3月～30年度	<p>ニンジンの生産量の拡大等の阻害要因であり、生産現場からの対策技術の確立が要望される、病障害に対して2課題を設定して解決策を明らかにする。</p> <p>新発生病害のニンジン乾腐病については、病原菌の発生病態を明らかにする。また、効果のある土壌くん蒸剤の登録取得のために薬効・薬害試験及び本病の発生が都市部であるため、土壌くん蒸剤の大気への拡散を考慮した環境にやさしい薬剤防除技術を確立する。さらに、主要ニンジン品種の罹病性及びアブラナ科植物のすき込み等の発病軽減効果を検証する。これらを基に防除技術を確立する。</p> <p>黒ずみ症及びエクボ症については、気象及び土壌環境などの栽培条件の違いが本症の発生に及ぼす影響を調査するとともに、黒ずみ症については、土壌養分の面からの解析を加えて発生要因を明らかにする。また、発生しにくい品種を明らかにし、その品種利用や発生要因に基づく耕種的な防止技術を確立する。エクボ症については、これまでの研究で発生要因が解明されつつあり、早期に解決を図る。</p> <p>ニンジン乾腐病、黒ずみ症及びエクボ症の対策技術が確立され、生産現場においてこれら、病障害の発生が抑制され、ニンジンの安定生産、品質の向上、生産量の拡大に寄与する。</p>	<p>(イ)黒ずみ症について、ハウ素が原因と決めているようだが大きな差が出ているとも思えない。他の原因の可能性はないか。</p> <p>(ウ)乾腐病対策について、バスマイド+ハイバリアではコストが通常の倍になる。どのくらいの被害が想定されるか、今回の対策が経済的にペイできるのか判断が必要ではないか。</p>	<p>(イ)発生に年次間差があり再現しづらいため、まずはハウ素を調べますが、それ以外の可能性も考慮して進めます。</p> <p>(ウ)被害が甚大なのでとにかく防除効果を優先しなければならず、クロルピクリンが使えない地域なので、コストがかかっても防除効果を優先した対策を考えました。病原菌密度と発病度の関係を踏まえた対策も今後考えていきます。</p>	4

検討結果は事務局が基準に従い以下の番号を入れる。

5: 独創性・貢献度等が高く、是非課題化した方がよい

4: 課題化した方がよい

3: 部分的に検討する必要がある

2: 大幅に見直す必要がある

1: 課題化する必要はない

様式7 (事前・公表)

平成27年度 試験研究課題検討結果票 (事前)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・予想される成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
2	水田利用野菜の大規模・省力栽培技術の確立	平成28～30年度	<p>水田利用野菜として今後、面積の拡大が期待されるレタス、ナバナ、ブロッコリーを研究対象とする。レタスでは冬どり栽培において、低温肥大性等の良い適品種を選定するとともに飼料用イネとの輪作体系における適切な施肥管理指針を策定する。ナバナでは、半自動定植機を導入するための育苗技術を確立し、安定した収量を得るために必要な生育初期の環境条件を明らかにする。ブロッコリーでは定植作業の遅れによる生育の遅延と秀品率の低下を改善するために、移植後の生育促進及び機械定植に適した苗の移植適期の拡大を図る。水田を利用した野菜栽培の現地圃場において生育収量の良否と降雨後の圃場の排水性との関係を明らかにし、簡易な栽培可能性の判定法を確立する。最終年には、大規模・省力栽培体系の実証と経営評価を行う。</p> <p>千葉県の水田利用野菜の大規模・省力栽培技術の確立することで、水田を利用した野菜生産が安定し、水稲生産者の所得安定に貢献する。加えて、千葉県全体の野菜栽培面積拡大が期待でき、野菜の生産拡大に貢献する。</p>	<p>(ア)土壌の水分制御が十分にできるか、苗の供給や労力競合など事前に課題を想定してから取り組むことが重要である。</p> <p>(イ)目標収量を定め、収穫調製の機械化も検討してはどうか。</p> <p>(イ)レタスでは、大玉が収穫できるような技術確立や品種選定、ブロッコリーでは、育苗の研究や2月収穫に適した品種なども検討してほしい。</p> <p>(イ)栽培に適したほ場を借りられるかどうかや、労力の集中する時期に季節雇用が確保できるかなどの課題もある。</p> <p>(ウ)ほ場の栽培可能性の判定法が簡易とは思えないが、どうか。</p>	<p>(ア)野菜栽培が可能なほ場かどうか排水性についての判断を客観的にできるようにします。</p> <p>(イ)目標収量を設定した上で技術開発を行います。収穫調製の省力化を踏まえた取組を行います。現地や担い手支援課と協力して進めていきます。</p> <p>(イ)JAや農業事務所と検討して課題を精査し、御指摘の問題にも取り組んでいきます。</p> <p>(イ)経営的課題について、現地の状況把握や施策提言をしていきます。</p> <p>(ウ)畝間の水がなくなるまでの時間で判定するなど、簡易な方法にしたいと考えます。</p>	4

検討結果は事務局が基準に従い以下の番号を入れる。

5: 独創性・貢献度等が高く、是非課題化した方がよい

4: 課題化した方がよい

3: 部分的に検討する必要がある

2: 大幅に見直す必要がある

1: 課題化する必要はない

様式9 (事後・公表)

平成27年度 試験研究課題検討結果票 (事後)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究計画の妥当性 (イ)研究成果の達成度 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
3	輸出用植木の生産安定化に向けた栽培技術の開発	平成24～26年度	<p>本プロジェクト研究では、砂質土壌における植木類の生産性の向上及び栽培期間中における圃場内の線虫密度低減化のための防除体系を確立した。</p> <p>(1) 輸出用植木類の栽培に適する砂質土壌として山砂が適切であることを明らかにした。</p> <p>(2) イヌマキ、イヌツゲ、キヤロボクを山砂で栽培する場合は、施肥方法の改善や腐葉土混合による土壌改良を行うことで、黒ボク土と同等の生育を確保できることを明らかにした。</p> <p>(3) 砂質土壌で栽培した輸出用植木類の根洗作業時間は黒ボク土に比べて30%程度短縮されることが明らかとなった。</p> <p>(4) 輸出前のオオハリセンチュウ対策として、砂質土壌の輸出用植木生産圃場における薬剤灌注処理による線虫密度低減技術を開発した。</p> <p>(5) オオハリセンチュウ対策として、新たにベノミル水和剤500倍液の根部(根鉢)浸漬処理が効果的であることを明らかにした。</p> <p>(6) 灌注処理と浸漬処理を組み合わせた防除体系は、オオハリセンチュウの密度を下げる事が可能であり、検疫における検出リスクが低減できる。</p>	<p>(ウ)土付きで輸出できる国が増えてきている。今後根洗いの必要性は無くなっていくと思う。いかに病害虫を減少できるかという方向に持って行くのがよい。</p> <p>(ウ)今後の検討課題として、輸出の流れの中で検証していただきたい。日本での隔離検疫、輸出前の薬剤処理、低温でのコンテナ輸送、という流れの後の状態を検証すると、細かい課題が出てくるのではないかと。</p> <p>(ウ)樹種によっては日本で間隔離栽培するので、その中でセンチュウを低減するという視点で考えてほしい。日本でキヤラの生産は千葉県のみで、キヤラを研究してほしい。</p> <p>(エ)海外現地の検疫検査や隔離検疫で使用されている薬剤などの情報について、情報交流の場があった方がよい。</p>	<p>(ウ)依然として土付きで輸出できない国があることから、土付きでない根洗い技術の提案も必要と考えます。</p> <p>(ウ)各々の小課題の結果から、対応できる技術のベースは出来上がったと考えますが、輸出の流れの中で、体系的に組み立てる必要がありますので、現場で実証していきたいと考えます。</p> <p>(ウ)隔離検疫の問題は重要なテーマですので、それを踏まえて今後の研究テーマを考えていきます。</p> <p>(エ)情報交換は行いたいと考えます。</p>	4

検討評価は以下の番号を記入。

- 5: 計画以上の成果が得られた
- 4: 計画どおりの成果が得られた
- 3: 計画に近い成果が得られた
- 2: わずかな成果しか得られなかった
- 1: 成果が得られなかった